慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「境界性パーソナリティ障害」からの〈回復〉とは何か： 分人主義とハビトゥス論の視点から
Sub Title	
Author	澤田, 唯人(Sawada, Tadato)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2016
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.82 (2016.) ,p.170- 174
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2015年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000082-0170

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「境界性パーソナリティ障害」からの〈回復〉とは何か
――分人主義とハビトゥス論の視点から――

澤　田　唯　人

1．問題の所在

本研究の目的は，「境界性パーソナリティ障害（Borderline Personality Disorder: BPD）」と呼ばれうる困難と，そこからの〈回復〉の軌跡を，当事者への継続的なインタビュー調査に基づく語りの分析から描きだすことにある。

BPDは「見捨てられ不安」や「不適切な怒りの制御困難」，「衝動的な自己破壊的行為」に特徴づけられ，近年，社会問題化する「若年女性を中心とした自殺関連衝動」[1]との高い関連性を指摘されている精神疾患のひとつである（NHKクローズアップ現代「若い世代の自殺を防げ――境界性パーソナリティ障害」2010年10月27日放送）。

日本ではBPDに関する全国規模の疫学的調査はおこなわれていないものの，1990年代から2000年代にかけて，その「急増」（川谷2004）が臨床家たちのあいだで指摘され，安定的な治療関係を結ぶことが難しいとされる本疾患への対応をめぐって活発な議論がなされてきた。2010年代に入ると，一部では外来や入院患者におけるBPDの減少傾向が指摘されるようにもなったが，しかしそれらもまた単純な患者数の減少を意味してはいない。牛島定信と斎藤環は，その理由として「かつてはBPDの診断の目安であったはずの行為が，日常に埋没している状況」を指摘する。「若い女性の手首自傷や過量服薬なども，近ごろでは発達上のひとつの挫折ととらえられ」，「かつては深刻な病状の指標であった行為が，総じて非常にカジュアルにとらえられるようになっている」。患者数の減少という一部の臨床家の所見は，むしろ現代社会におけるBPDの「日常化（常態化）」を反映したものであり，「ある程度軽症化しながら拡大しつつある」過程と考えられている（牛島＆斎藤2014）。

このような社会の側の受けとめ方の変化のなかで，BPD当事者たちは医療の現場から遠ざかりつつある。そしてそれゆえに，命にかかわる事態となってようやく医療の現場にあらわれても，再びその姿を日常のなかへと消していくことも多いために，当事者たちの実態はいっそう不透明化しつつあるとされる（高岡2014）。だとすれば，こうしたBPDへの社会的なまなざしの変化のなかで，彼女たち自身は自らの抱える困難やそこからの〈回復〉をどのように考え，またどのようにしてそこへたどり着こうとしているのだろうか。本研究では，これまで進めてきた診断まもない「渦中」を生きる当事者へのインタビュー調査に加え，一度は通院や入院を経験したものの，さまざまな理由で医療の場を離れながらも〈回復〉を志向している当事者の方々への調査に本格的に着手した。またその初年度として，当事者にとってBPDからの〈回復〉とは何でありうる（あった）のか，その内実をひも解くための手がかりを，実際に〈回復〉へと歩みをすすめ，現在は「元」当事者になりつつあると語る方の経験に即して具体的に検討することをひとつの課題とした。

2．「何かが『治った』わけではないけれど，〈回復〉しつつある」

これまで，BPD当事者の生きる「見捨てられ不安」や「衝動的な自己破壊的行為」は，過去の深刻

な経験（虐待や分離不安など）に起因する「パーソナリティ」の障害（認知機能の歪み）として，幾分か実体論的な理解がなされてきた[2]。そのため，BPDをめぐる治療実践もまた，そのような「人格」の歪みを，薬物療法や認知行動療法によって「治す」という方向で模索されてきたといえる。しかしながら，過去にBPDの診断経験（既往歴）をもつ人々が，若年自殺未遂患者の約6割を占めていたという都立松沢病院の調査結果にも示されるように，「パーソナリティ」への矯正的治療は，（一定の効果をもちつつも）対処療法的な一時しのぎとなるケースも多いことが指摘されている（朝日新聞「若年自殺未遂患者の半数超『境界性パーソナリティ障害』都立松沢病院調査」2010年7月27日）。

実際，「元」当事者になりつつある彼女たち自身もまた，現在の自らの状況について「決して何かが『治った』わけではないけれど，それでも〈回復〉しつつある」と語る。一見矛盾するようなこの語りは，しかし従来の精神医療が目指してきた（実体的な）パーソナリティの「治癒」とは異なる，当事者たちにとっての〈回復〉のかたちが確かに存在することを示している。そこで本研究期間では，これまで進めてきた診断まもない「渦中」を生きるBPD当事者と，〈回復〉しつつある「元」当事者との語りを比較検討することで，自己破壊的行為の〈生成〉・〈維持〉・〈回復〉をめぐるプロセスが，どのような社会的諸文脈との相互関係のなかで生きられているのかを検討し，以下のような示唆を得た。

まず，診断まもない当事者たちが自己破壊的行為（リストカットやオーバードーズ）を抱えていく〈生成〉プロセスの起点には，確かに精神医学が指摘するように，「過去」の深刻な経験を，「現在」に再演させる葛藤的文脈（共依存関係など）の存在が認められた。だが同時に，それ以外の文脈（学校・仕事・地域など）では「何も問題はなかった」と語られるように，その初期においては生活世界の複数性が保たれ，問題は住み分けられていた。

しかし彼女たちが，次第に葛藤的文脈に「留め置かれ」，生活世界の複数性を失うことで事態は〈深刻化〉していくことになる。つまり当事者たちは，人格機能の歪みから単線的に社会生活に困難を抱えていくのではなく，あくまで生活世界における葛藤的文脈の側の肥大化によって，複数的な生活世界のバランスを崩されるために，見かけ上，「パーソナリティ」に問題があるかのような状態になっていくのである。ある当事者は，この〈深刻化〉のプロセスを「分人主義」（平野2012）[3]の考え方に基づいて，次のように語っている。「一番ひどいときは，特定の分人だけがめちゃくちゃ大きいんですよ，比率的に，ほかの分人がちっちゃすぎて，だから影響すごい及ぼしちゃう」。この語りは，自己破壊的行為に及ぶことになった特定の「分人」が，それを〈生成〉させた文脈との共謀関係のなかで肥大化し，ほか

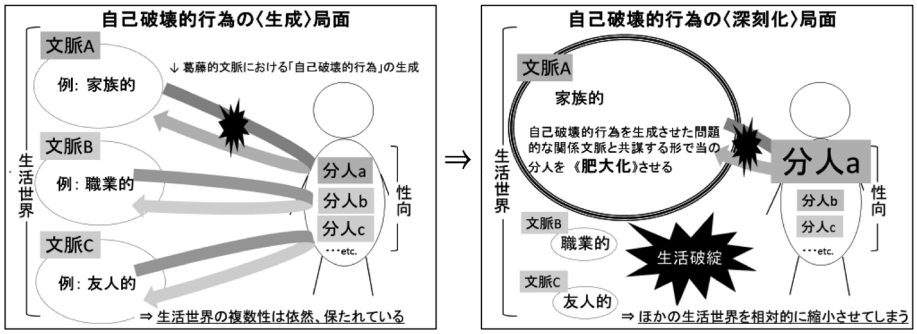


図1　自己破壊的行為の〈生成〉から〈深刻化〉へのプロセス

の生活世界の文脈を相対的に縮小させ，破綻させていく事態として捉えられる（図1）。

3.「まだたまにでてくるけど，ボーダーさんが小さくなってきた」

以上の検討からは，当事者にとってのBPDからの〈回復〉の軌跡が，「パーソナリティ」の治癒ではなく，むしろ「自助グループ」や「就労支援」などを通じ，――根本的な生きづらさを残してはいるものの――再び生活世界の複数性とそのバランスを取り戻していく過程（＝葛藤的文脈の相対的縮小）と相即的な営みである可能性が示唆される。実際，ある別の当事者は，次のように語っている。「まだ（腕や手首を）切りたくような感じはたまにでてくるけど，ボーダーさん（BPD）は小さくなってきています」。

こうした語りは，「境界性パーソナリティ障害」と呼ばれうる生が，それを矯正することがもとめられるような実体的な問題ではなく，あくまでいまここという特定の文脈状況との関係性のなかで立ち現れる，ひとつの「分人」の姿であることを示している（図2）。ひとは本来，たったひとつの「人格」ではなく，状況依存的・他者依存的に複数の「分人」を生きるのだとすれば，それらあいだのスムーズな往来を支える，生活世界の「複数性」への支援それ自体が，心理療法などと並ぶ重要な効果をもつことを裏づけることになる[4]。

4.　今後の課題

以上のように，当事者にとっての〈回復〉とは，生活世界の複数性を取り戻し，問題を抱える「分人」を（治すのではなく）相対的に縮小させていく（＝ほかの分人たちの出番を増やしていく）ことである可能性が，本研究期間における調査分析からは示唆された。

しかしながら，これらは重要な手がかりではあるものの，すでに〈回復〉期にある人々が遡及的に構成したナラティブに基づくものであるという点に一定の限界を認めなければならない。したがって，BPDからの〈回復〉のプロセスが具体的にどのようにひらかれていくのか，そのより詳細な記述が不可欠となる。また，現在は〈回復〉しつつあると語る当事者の方々も，その道筋は決して一方向的で平坦なものではなく，それまでとは異なる別様の困難を抱えていることが本調査からは明らかとなっている。今後は，「渦中」を生きる当事者の方々と〈回復〉しつつある「元」当事者の方々の双方が歩む軌跡に伴走する継続的なインタビュー調査によって，当事者にとってのBPDからの〈回復〉が，どのよ

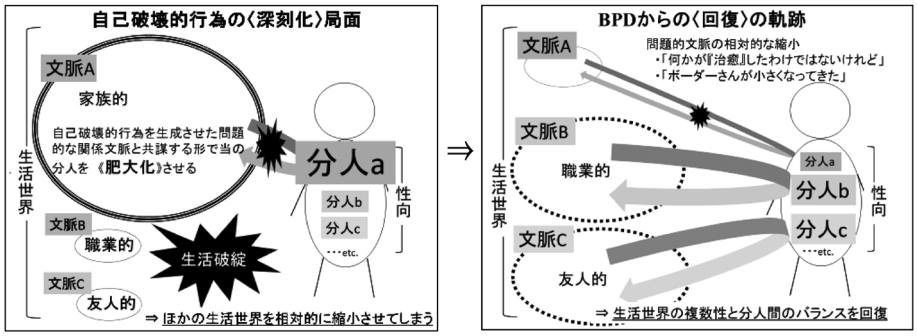


図2 「元」当事者の語りから示唆される〈回復〉の軌跡

うな社会的条件のもとで展開していくことになるのかに焦点を合わせつつ，本研究をより深化させていきたい。

なお，本研究期間の成果は，2013年度から2014年度まで日本学術振興会特別研究員として取り組んだ研究課題「感情の社会理論――『境界性パーソナリティ障害』の生活世界をめぐって」（課題番号：13J06860）の成果と一部を合わせて，以下の学会報告および学術誌掲載論文にて公にしている。

〈学会報告〉

・「『境界性パーソナリティ障害』経験の社会学的記述――分人主義とハビトゥス論の視座から」第15回日本外来精神医療学会大会パネルディスカッション「人格，身体，薬をめぐる病の語り――精神障害の社会科学的アプローチ」，明治学院大学，2015年7月.

・「ハビトゥスとアディクション――『境界性パーソナリティ障害』からの〈回復〉とは何か」，第88回日本社会学会大会，早稲田大学，2015年9月.

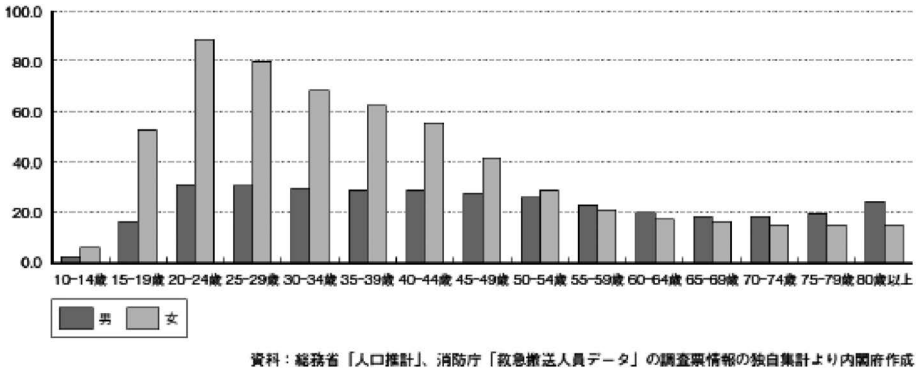
〈学術論文〉

・「腫れものとしての身体――『境界性パーソナリティ障害』における感情的行為の意味」（特集：現代社会と生きづらさ）『社会学評論』第264号，日本社会学会，pp. 460–79, 2016年3月.

注

1）平成27年度「自殺対策白書」（内閣府2015）によれば，中高年層での自殺率低下の一方で，若年層（20～30代）における自殺率は依然として高く，死因の第1位を「自殺」が占め続けている。なかでも，同報告書では，自殺者における自殺未遂歴ありの比率が「女性の若年層で高く」（表1），「30歳前後の女性においては，自殺者のほぼ2人に1人が過去に自殺未遂の経験がある」現状が明らかにされている（内閣府2015: 48）。

表1　自損行為による男女別の救急搬送率（人口10万人あたり）



2）たとえば，精神医学において，「パーソナリティ」とは「個人個人に持続的に存在している，環境や自分自身についてのとらえ方，思考の仕方，関係の持ち方の様式の総体であり，それらは特定の環境においてのみ認められるというよりは，時や場所を超えてさまざまな場面に共通して認められる様式である」。したがって「パーソナリティ障害とは，その様式に柔軟性がなく，非適応的で，そのために著しい機能障害または主観的な苦痛が生じている」状態として把握される（白波瀬2008: 1219）。

3）分人主義とは，人間はたったひとつの「人格（individual）」をもつのではなく，実際には対人関係ごとに異なる「その人らしさ」を生きているという考え方である。個人の中には，対人関係の文脈に応じて自然と生じるさまざまな「分人（ディブ）」がおり，それは本当の自分が，色々な仮面（キャラ）を使い分けることとは区別される。「キャラ」とは違い，演じ分けたり使い分けたりするひとつの主体があるという「操作的（operation-

al)」なものではなく，向かい合った相手との「協働的（cooperative)」なものであり，その場や相手に応じた「自分」になってしまう（文脈ごとに呼び出される)。この認識は，社会学における「ハビトゥス」の複数性論（Lahire 1998＝2013）とほぼ重なる位置を占めている。

4）また以上の検討からは，BPDを生きる当事者たちが，なぜ「見捨てられ不安」や「共依存（ふたりぼっち)」の関係に陥ってしまうのかという点にも新しい見方を与えてくれるように思われる。たとえそれが問題的な文脈であっても，生活世界の文脈（＝依存先）の少なさゆえに，当事者たちはそこに必死にしがみつくしかなくなるのではないか。「見捨てられ不安」や「共依存」に陥る背景も，生活世界のバランスを失い，依存先の分散（＝複数化）ができないためだと考えられるのである（熊谷2012)。それゆえに，本来は関係論的な問題が，見かけ上はその人の「人格」の問題として実体化されてしまうのである。

参考文献

平野啓一郎，2012,『私とは何か――「個人」から「分人」へ』講談社.
川谷大治，1998,「境界性人格障害」牛島定信・福島章編『臨床精神医学講座7――人格障害』中山書店，87–95.
熊谷晋一郎，2012,「依存先の分散としての自立」村田純一編『知の生態学的転回2――技術：身体を取り囲む人工環境』東京大学出版会: 109–136.
Lahire, B, 1998, *L'homme pluriel: Les ressorts de l'action*, Paris: Nathan.（＝2013，鈴木智之訳『複数的人間――行為のさまざまな原動力』法政大学出版局.）
内閣府，2015,「自殺対策白書」(http://www8.cao.go.jp/jisatsutaisaku）2016年6月閲覧.
斎藤環・牛島定信，2012,「対談：変容する社会とパーソナリティ障害のかたち」週刊医学界新聞（第2998号).
白波瀬丈一郎，2008,「境界性パーソナリティ障害に関する最近の動向――精神療法を中心に」『精神経誌』(110) 12: 1219–24.
高岡健，2014,「ボーダーラインは消えたか――消える虚像・残る実像」『精神医療』(76): 32–38.

現代スコティッシュ・ナショナリズムの政治社会学的考察

髙　橋　　誠

はじめに

以下，2015年度社会学研究科博士課程学生研究支援プログラムの助成によって得られた知見をもとに今後執筆予定の論文の研究目的と論文構成案を記していく。

研究目的

著者は「イギリス独立党台頭の政治社会学的考察」(髙橋2015）の中で，「スコティッシュ・ナショナリズムとUKIPの台頭という2つの対照的な政治・社会現象を合わせ鏡にすることによって，その中心にあるイギリス共通の政治・社会的問題の本質が見えてくるかもしれない」(髙橋2015: 25）と記した。

その後，2015年5月に実施されたイギリス総選挙で，スコットランド59選挙区のうち56選挙区でスコットランド国民党（以下SNP）が議席を獲得し，獲得議席数は1つに終わったが，得票率に関しては前回総選挙時から9.5%伸ばし，イギリス全体で12.6%の得票率を記録したイギリス独立党（以下UKIP）の躍進は注目を集めた。

こうした選挙結果を受けて，ボグダノーは*The British General Election of 2015 and the Rise of the Meritocracy*というタイトルの短い論考の中で，SNPとUKIPという政治スペクトラム上では対極的な